慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	信頼社会の勤勉さ：その原因と崩壊(野口祐教授退任記念号)
Sub Title	Diligence in Creditability Society : Its Origin and Collapse(In Honour of Professor Tasuku Noguchi)
Author	清水, 龍瑩(Shimizu, Ryuei)
Publisher	
Publication year	1992
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.35, No.1 (1992. 4) ,p.1- 14
JaLC DOI	
Abstract	日本人にとっては,まわりからいかに評価されているかが人生の最大の関心事の1つである。勤勉に働き,まわりから評価・信頼されればさらに勤勉に働く。この勤勉→信頼の相互関係が日本人をワークホリックにさせてきた。勤勉を普遍的,最高の価値とする考え方は,古くは大乗仏教の,世の中には「関係しか存在しない」だから「よりよい関係をつくる」のだという宗教倫理に根ざすが,具体的には江戸時代の儒教,朱子学の「信義」を重んずる思想によって強化され,さらにその時代の安定した共同体の習慣として定着していった。この勤勉→信頼の相互関係のチェーンが日本の富裕化,核家族化による若者の価値観の変化によって崩れはじめた。しかしこの新しい若者を評価する新しい評価システムは未だできていない。
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-19920425-04056134

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田商学研究
35巻 1 号
1992年 4 月

信頼社会の勤勉さ

——その原因と崩壊——

清 水 龍 瑩

<要　約>
日本人にとっては，まわりからいかに評価されているかが人生の最大の関心事の1つである。勤勉に働き，まわりから評価・信頼されればさらに勤勉に働く。この勤勉⇄信頼の相互関係が日本人をワークホリックにさせてきた。勤勉を普遍的，最高の価値とする考え方は，古くは大乗仏教の，世の中には「関係しか存在しない」だから「よりよい関係をつくる」のだという宗教倫理に根ざすが，具体的には江戸時代の儒教，朱子学の「信義」を重んずる思想によって強化され，さらにその時代の安定した共同体の習慣として定着していった。この勤勉⇄信頼の相互関係のチェーンが，日本の富裕化，核家族化による若者の価値観の変化によって崩れはじめた。しかしこの新しい若者を評価する新しい評価システムは未だできていない。

<キーワード>
勤勉，信頼，大乗仏教，儒教，評価，江戸時代，労働，二宮尊徳

1　勤労観の歴史

1—1　ヨーロッパの勤労観の歴史

有史以来，人間の労働は単に生きるための糧をえようとする欲求からだけではなく，宗教的，社会的満足をえようとする欲求からなされている。従って人間の勤労観は，その時代の宗教，社会制度，職業によって異なっている。未開社会でも，狩猟は単なる技術的生産活動ではない。その労働の中には，狩の吉凶を占う予感的夢想，贖罪の儀礼，魔術的・宗教的行動が含まれている[1)]。古代ギリシャの詩人ヘシオドス（前8世紀）は，専ら農業労働について述べ，その労働の中では神々，倫理，仕事の手順がしっかり融合している。たとえば“農耕を始めるに当っては，地の神ゼウス，浄らかなるデーメーテールにむかって，デーメーテールの聖なる穀物（たなつもの）が健やかに育ち，

1）今井仁司　『仕事』　p.8，弘文堂，1988年。

重き穂を垂らしめたまえと祈れ―，犂の把手の端を片手に握り，革紐の留め針に力をかけて犂を曳く牛の，その背に突き棒を打ちおろす折の心得事じゃ，そのやや後から鍬をもった下男が続き，種子を隠して鳥どもに難儀をかけるがよい[2)]。”と言って，農業労働における宗教的，儀礼的手続きを述べている。一方ヘシオドスは，“人間は労働によって家畜もふえ，裕福にもなる。また働くことでいっそう神に愛される。……お前が働くようになれば，たちまち怠け者は，お前が金持ちになるのをみて羨むであろう。富には栄位と名誉が伴うからだ[3)]。”といい，人間は労働することによって富と地位をえ，他人から羨望を得るようになることを強調し，労働による人間の社会的満足についても，うったえている。

このようにヘシオドスの詩では労働は高くうたわれたのであるが，現実にはギリシャ，ローマは典型的な奴隷社会であり，ギリシャ，ローマの市民は労働を一種の呪いと考えていた。自由市民だけが人間であり，奴隷は動物とみなされていた。市民は広場に集まり，政治，芸術，哲学を論じ，演劇，スポーツを観賞した。多くの肉体労働はもちろん，記帳，計算，家庭教師などの精神労働も奴隷にやらせた。こうした奴隷社会においては，労働はすべて忌むべき呪われた活動であった[4)]。この時代には労働は奴隷が自ら及び市民の糧をうるためにのみ行われ，奴隷の宗教的，社会的満足のためにという考えはなかった。

中世のヨーロッパはキリスト教が支配し，これが封建社会秩序と結びついて，きわめて閉鎖的社会をつくり上げていた。聖書は人間が労働をしなければならないのは原罪のためであり，苦痛であると説いた。しかし同時に労働によってえた成果は隣人に与えるべきだといい，また自分自身で必要なものは労働によってえなければならないとした。それをしない怠け者は共同体から追放された。ギリシャ，ローマの奴隷社会の勤労観よりは一歩進んできた。とはいえカトリックでは肉体労働は修道院の必要物のためだけに制限され，肉体労働は，精神労働を禁ぜられた俗人に負わされた。トーマス・アキナス（1225～1274）は，国家は道義的生活を営むに必要な制度であり，教会とならんで人間最高の共同体であるとし，国家がその社会的な目的を遂行していくためには，分業および職業の分化が不可欠であるという。そして職業や仕事の階層を国家に対する価値に応じて順位づけた。農業が最も高い地位にあり，次に手工業が続き，商業は最後であった。そこでは労働は財産や利潤の唯一の基礎として認められた。ただ人間は神に祈ることによって労働義務をまぬがれるとし，教会活動はいかなる肉体労働よりまさると説かれた。このように中世ヨーロッパでは，キリスト教の教義が労働を消極的に位置づけ，封建社会秩序と結びついて，職業を身分的な拘束の中に封じ込めようとしていた。しかし15世紀になって，生産力，経済力の発達に伴い社会分業がすすみ，部分的

2）ヘーシオドス（松平千秋訳）　『仕事と日』　岩波文庫，pp.66～67.
3）同上書　p.48.
4）辻勝次　『仕事の社会学』　pp.61～62，世界思想社，1980年。

にも職業，身分の枠がくずれ，労働に関する意味づけも変ってきた。この変化は東ローマ帝国の崩壊によって加速され，宗教改革につながっていった。

宗教改革をおこしたカルヴァン（1509～1563）の古典的プロテスタンティズムは，人間は神の栄光を地上にあらわすために働くのだという。M．ウェーバーは，神が死んでしまったあとは，われわれの生活は「ただ存在し生起するだけ」の生しかない，という。この呪われた運命から逃れる道は，科学の発展と倫理的宗教の運動の２つしかない。そこで現世を実践的，倫理的に合理化しようとする[5]。すなわちこの世が絶望的無意味であるから，逆説的に人間は労働に精力をかたむける。プロテスタント的禁欲倫理は，この世界の世俗的職業の全面的な価値否認から生れる。無機的・無意味的労働，それに没頭する自分自身をも労働と同様に無機的・無意味にすることによって神の恩寵がえられるのだという[6]。この時代には，後代にでてくるB．フランクリン（1706～1790）のいうような，労働はよいことだ，金儲けはよいことだという思想は全くなかった。労働も金儲けも何ら価値がないという考えが決定的であった。無意味な労働を没価値的に実行することから，逆説的な成果として，事実に即した合理的な生活態度が生れた。これがあとになって合理的生活運営，合理的経営の思想に結びつき資本主義社会の基礎をつくっていった。すなわち近代ヨーロッパの勤労観はプロテスタンティズムという宗教思想に根ざして発展させられたのである。

１－２　中国の勤労観の歴史

近世の日本人の勤労観は，中国から導入された宗教思想，社会制度から大きな影響をうけた。中国には仏教，道教，儒教の３つの宗教がある。中国の仏教は，当初は，原始インド仏教であり，世俗外的パターンの宗教であって，中国人の強烈な世俗内的心理とは相容れないものであった。しかし慧能（えのう）（638～713）の新禅宗の創立によって，この世俗外的仏教が中国人の現世的な文化と一致するようになる[7]。慧能は，修業は在家でやってもいい，寺にいる必要はない，と説く。この説は当時にあっては驚天動地の考え方だった。世間の人がその本分を尽すことこそが此岸を超越できるただ一つの道である，という。カルヴァン派のいう，人間がその本分を尽せば神の恩寵がえられるという考えと全く同じである。しかしこの中国の新禅宗はヨーロッパの宗教改革ほどの力はなかった。唐代の仏教の宗派は数多く，禅宗はその一つにすぎず，しかも中国の民衆は，儒教，道教，仏教を同時に信仰し，仏教寺院はヨーロッパの教会ほど地域社会に根ざしていなかったからである。

宋代以降中国仏教はインド仏教から変化し，人間の働くことを強調しはじめた。原始インド仏教

5）石坂巌　『知の定点』　pp.202～203，木鐸社，1984年。
6）今村仁司　前掲書　pp.142～143.
7）余　英時（森紀子訳）　『中国近世の宗教倫理と商人の精神』p.57，平凡社，1991年。
この節の以下の論旨も同書によるところが多い。

の教律では仏教徒は乞食を生活とし農業生産にたずさわらなかった。南北朝から安史の乱までは，僧は信徒の施物，托鉢，乞食などで生きている。安史の乱以降，富者の喜捨が少なくなり，僧は自ら食べていかざるをえなくなった。百丈懐海は，“あしたに参じ夕べに集まり，飲食を規則正しくするのは節倹を示す。普請の法を行うは，上下ひとしく努めることを示す。（朝參夕聚，飲食随宜，示節約也，行普請法，示上下均力也。）[8]”という。ここで「普請」とは「衆を集めて作務する」をいい，「作務」とは労働である。宋代の中国仏教は節約と労働を重視するようになったのである。

道教は，その宗教的性格からいえば，仏教よりはるかに世俗的である。新道教としては，北宋から南宋への転換期に生れた全眞教が最も重要である。これは慧能の新禅宗から影響をうけている。全眞教の宗旨は，“田を耕し井戸を掘り自らの労働で食う。慈悲ぶかく物に接することによって風俗の教化をしよう。”と教える。これは道教本来の遁世的態度から世俗的禁欲への転換を物語っている。特に勤苦に服する「打塵労」を強調した。この「塵労」というのは世俗に入って，「利他」「功行」をなすことである。この「功行」自体は何ら目的はなく，究極の目的はやはり「道」を成就することである。以上のように仏教も道教も，宋代以降その本来の世俗外的パターン，遁世的パターンをはなれ，世俗的，現世的な労働重視のパターンに移っていった。

儒教はもともと世俗的な教えであるが，労働については余り考えていなかった。宗教性，儀礼性に力を入れていた。朱子等の新儒教も新禅宗によって自己の「心性論」を発展させたが，それはあくまで宗教論であった。すなわち，朱子は“儒教は心と理とが一体であるが，仏教は心と理とが別々である。……仏教は空であり，理なんてありはしないと考えるが，心の方は心は空でありながらも，そこに万物の理がちゃんと備わっているという。（しかし）たとえ心と理とが一体だと説くとしても、気質や物欲の偏りを洞察しなければ、本当の見識ではない”[9]。と批判している。この新儒教で重要なのは，仏教では「彼岸」と「此岸」とが背離しているのに対して，儒教ではそれらが向き合っているという考えである。この考えから世俗的な精神が発揮されることになった。

この儒教は宋代以降の商業経済の発展にともなって，それまでの固い社会秩序維持の考えを変えていった。儒学の大師である王陽明（1472～1528）は，1525年，商人の方麟のために書いた墓表に，四民（士，農，工，商，）はその各々が自分の資質に近く能力の及ぶところを業として，心を尽せば，人間生活に同等に貢献する，と書いた。これはその後起る「儒を捨て賈（こ）に就く」という新しい価値観のはじまりになった。明清以来のこの風潮は，中国全体にひろがり，特に商人集団の多い地区では，多くの士人が商人階層に転換していった。そして新たに「賈道」という言葉が商業に生れ，金儲け以外の新たな意義づけ，たとえば，それまで士人の行っていた族譜の編集，宗祠・寺廟・橋梁の修築など，学問的なこと，公的なことまでも商人が行おうとした。しかしプロテスタント倫理の

8）　贊寧撰　『宋高僧伝』（上）p.236，中華書局，1986年。
9）　諸橋轍次，安岡正篤編　『朱子語類』朱子学大系第六巻，p.376，朝徳出版社，1981年。

天職（calling）のような考えはなかった。新儒教のバックアップで明時代以降は商人の社会的地位は向上した。

このように有史以来，労働についての考え方は，その時代の宗教，社会制度の変化によって徐々に変化した。わが国の労働観，勤労観も，江戸時代までは中国から導入された仏教，道教，儒教の宗教思想と社会秩序とによって形づくられた。明治以降になってはじめて富国強兵が叫ばれ資本主義社会体制ができ上り，その中にプロテスタンティズムの合理性が僅かずつ発揮されるようになった。

2　日本人の勤勉さの原因

日本人の勤勉さは，「まわり」から高い評価・信頼をえたいという欲求から生れる。日本人は「まわり」からいかに評価されているかが一生の最大の関心事の一つである。すなわち「まわり」が高い評価・信頼を与えると，その人間は勤勉になる。この「まわり」は，「仕事に打ち込む」勤勉さがあり，しかもそれをまわりに認めさせるだけの「気配り」能力があり，しかもそれらをおもてに出さない「控え目」な態度のある人間を高く評価し，信頼してきた。そして評価され信頼されると益々勤勉になる。これが昔から長く続いた，日本人の人間評価の無意識の価値観であり，この勤勉⇄信頼のレシプロカルな関係が維持されながら，日本人は過労死する程勤勉になってきた。

2－1　「仕事に打ち込む」生真面目さ

日本には，「仕事に打ち込む」ことを「道」すなわち自己修養の道と考える風土が昔からあった。平安時代の職人集団は天皇家や神仏に仕えることにプライドをもっている。そのプライドによってその技能を発揮し向上させた。その意味において職人の職業上の活動は根底において宗教活動であった[10]。従って神具，仏具をつくる道具にも精神性，宗教性が与えられ，これを用いてよりよい物を造ることは自己修養であり，自己を向上させるものと考えられている。また道具をうまく使用することも修養と考えられている。すなわち物的機能を特徴とする道具や装置も精神的存在として高められる。実用，便利をみちびき出すのは，むしろこれを制御する人間の芸，技，能，術の力であった。この道具の運用力を高めるのは，修道と作法である[11]。さらにこの技，芸，術の中に美を日本人が追求していくうちに，その美そのものが宗教になってしまうことも日本の特徴である[12]。従ってまた美を追求する行為も「道」であり自己修養になっていく。この「仕事に打ち込む」のが

10）島田燁子　『日本人の職業倫理』p.151，有斐閣，1990年。
11）栄久庵憲司　『実用と象徴―道具の証す人間観―』伊東俊太郎他編　「講座比較文化第7巻，日本人の価値観」p.206，研究社，1976年。
12）Donald Keene　「日本人を語る」朝日新聞，1991．1．7．

宗教に結びつくという意識は，当初は神社，仏閣に直接仕える人々の中に醸成されていった。

江戸時代になって，この「道」すなわち「自己修養」の価値観は，農業はじめあらゆる仕事，職業の分野に拡がっていった。江戸時代の農本思想家，実践家である二宮尊徳は，農民に自らの欲望を断ち，その「仕事に打ち込む」生真面目さが「道」につながることを説いている。“夫人身あれば欲あるは則天理なり，……私欲は田畑に譬れば草なり，克つとは，此田畑に生ずる草を取捨るを云，己に克つは，我心の田畑に生ずる草をけずり捨，とり捨て我心の田畑を繁茂さする勤也[13)]”といい，人間の心の中にも田畑と同じように雑草（私欲）が生え，そのままにしておけば荒廃地になってしまうと，農民に説いてまわった。この雑草を取り除くことが尊徳が最も重視した「勤労」である。すなわち農業生産のための「勤労」と己に克つための「勤労」とは不可分であり，ここに「勤」と「道」とが一体化する基礎があった。また尊徳は，“勤は實あらしめるもの，勤めるから實となる，勤めなければ何物もない。勤は實在の道，怠は非在の道である。……”として，「勤」の最重要性を説いた。さらにこれが「道」に結びつくには，“未来を慮って今日を譲り，人を慮って己を譲る。譲る一歩一歩は天に還る道，宗教の道であり，分度に隨って譲るは人界をたてる功程，道徳の道である。これを實現する力は勤の一字である[14)]。”として，「勤」が最も重要であるが，それが宗教的な「道」になるには，それらの間に「推譲の道」[15)]の考えが介在することを強調する。これらの「譲ること」「分度」は後述の日本人の「控えめ」にもつながっていく。このように尊徳は仏教思想に儒教思想を重ね合せて自らの思想体系をつくっていった。すなわち，尊徳はあらゆる仕事，職業はお互いに相互依存関係にあり，互いに一つも他を欠くことができない[16)]。ここに報徳の道が示される。天地人生は徳と報徳の感應である，と説く。この相互依存関係の重視は後述の大乗仏教の思想によって裏打ちされている。“己身は自餘一切のものの徳の賜なることを知り，これに報ゆるに徳を以てする道は勤の一字であって，人道の精髄たる勤は天道の至誠無息を学ぶものであり，…[17)]”と，勤勉こそが人道の発露，修養の道であることを主張する。尊徳こそが日本人の勤勉さの基礎を築いた人ではないかと筆者は考えている。彼はそれまでの仏教，儒教，道教の考えを庶民にわかりよく統合，体系化した思想家，実践家であった。

このような農業の勤勉さは「道」であり「自己修養」につながるという思想は，この時代の多くの思想家によっても主張されている。たとえば江戸時代の仏教思想家鈴木正三は，農民がその「仕事に打ち込む」ことは剣道，書道と同じように一種の悟りに達する農道であり，そう考えることによって労働に生きがいを見出そうとする。彼にとっては農業は利潤追求ではなく悟りに達する修行

13）二宮尊徳　『二宮翁夜話巻之一』日本思想体系52，pp.124～125，岩波書店，1973年。
14）西晋一郎　『尊徳・梅岩』p.67，大教育家文庫5，岩波書店1938年（復刻版　1984年）。
15）二宮尊徳　上掲書　p.166.
16）二宮尊徳　上掲書　p.42.
17）西晋一郎　上掲書　p.28.

の方法であった。“農業ヲ以テ業障を尽スベシト大願力ヲ起シ，一鍬一鍬ニ南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏ト耕作セバ，必ズ仏果ニ至ルベシ。只天道ニ万事任セ奉リ，正直ヲ守テ，私欲ヲカワクベカラズ。然ラバ亦天道ノ恵ミニテ，今世後世トモヨカルベシ。……[18)]”と説いている。

江戸時代中期になると，貨幣経済が拡がり，商人が力をつけはじめ，その本来の「仕事に打ち込む」こと，すなわち「利益追求」をおしすすめることは，武士のそねみ・ひがみをうけ，武士の儒学と合わなくなってくる。またその時代，平和が続いたため武士道が抽象化し，それに伴って商人も現実の生臭い「利益追求」を表に出さず「信義」という抽象倫理に重きをおかざるをえなくなってきた。すなわち士農工商の序列で固定化された社会制度の下で，商人が「仕事に打ち込み」「利益」を深く追求するには，逆に分限を強調せざるをえなくなった。これが商人「道」となる。農民の「道」が「勤」を第一義とするのに対し，商人の「道」は「分」とか「信義」とかが第一義となっている。上述の中国の「賈道」は商人の活躍の場を拡げたのに，日本では少なくとも表面上はその活躍の場を狭めていった。この分・分際・分限・身のほどは，社会構成員が分相応に生活することをいい，これが商人の信義になっていった。この時代には発明・発見は禁ぜられ，積極的競争はおさえられ，新販路・新取引の開拓は拒まれ，古きが故に尊しとされた。石田梅岩は，“商人の道を知らなければ，貪ることを勉めて家を亡す。商人の道を知ると欲心を離れ，仁心を以て勉め，道に合（かなふ）て栄えるのが学問の徳である”[19)]。といって，商人の「道」は貪らないこと，分限を守ることだと主張する。一方「信義」については大丸百貨店の祖である下村彦右衛門の店是「先義而後利[20)]」によくあらわれている。すなわち“義を先にして利を後にする者は栄え，利を先にして義を後にする者は辱められる”，といって信義の重要性を強調する。しかし分限とか信義という前に，何しろ仕事にはげまなければ商売は成りたたない。井原西鶴はそのことを，“人の分限になること仕合といふは言葉，まことは面々の智慧才覚を以てかせぎ出し，その家栄ゆる事ぞかし[21)]。”とそのホンネを明らかにしている。

以上のように，日本人の「仕事に打ち込む」ことの遠因を探ると，平安時代からの職人の神社，仏閣に仕える仕事の宗教性，江戸時代の農民の「勤」の価値観，商人の「分限」に制約された利の追求などが，みなそれぞれ「道」や「自己修養」につながっていくという意識に基づいていることがわかった。そしてそれが江戸時代後期の儒学，特に朱子学の死生観に基づく宗教性，身分秩序に基づく礼教性[22)]によって強化され，現在の「仕事に打ち込む」人間を高く評価する価値観の基礎をつくった。

18）鈴木正三　『「驢鞍橋」上　九十八』鈴木鉄心編；鈴木正三道人全集，p.168，山喜房仏書林，1962年。
19）石田梅岩　『都鄙問答—或学者商人の学問を譏の段—』p.165，岩波新書，1968年。
20）宮本又次　『日本の商人「上方商人の戦略」』pp.164～205，ＴＢＳブリタニカ，1983年。
21）井原西鶴　「世間胸算用，巻二，一，銀壱匁の譜中」檜谷昭彦編；世間胸算用，p.55，桜楓社，1986年。
22）間　宏　「儒教資本主義と現代の経営」1991．10．組織学会大会発表，於早稲田大。

ただこの日本人の「仕事に打ち込む」ことが，後述のように，「まわり」の評価と別々で行われるわけではなかった。すなわち最も独立的，個人的であり，神社，仏閣の要請という直接的な神仏の命による職人の仕事でも，まわりの評価が重要な誘因になっていた。江戸時代の工芸にしろ染織にしろ，製作のプロセスには数多くの名人が介在していた。そして各プロセスでの名人が途中の工程でのでき具合を厳しく評価していた。ものは厳しく評価されつつかたちをなしていった。[23]当然各プロセスの職人は，その名人や仲間，すなわち「まわり」の評価を強く気にして仕事をすることになる。もちろん信義を重視する商人は，同じ町内に近接して生活している株仲間という「まわり」の評価をつねに気にし，積極的な宣伝活動によって顧客を争奪したり，ぬけがけで取引するようなことはしなかった。

2－2　「気配り」能力と「まわり」の評価

日本人は「まわり」からいかに評価されているかが一生の最大の関心事の一つである。これは古くは，大乗仏教の「相互関係」しかないという「色即空，空即色」の思想が根底にあり，その後儒教の「信義」の思想で強化され，江戸時代の安定社会での「共同体」習慣に定着していった，と筆者は考える。

仏教で一般に言われる「色即空，空即色」とは，“世の中の事物やものは必ず消滅するものであり，真の実体は関係だけである。この世の中には関係しかないことを深く認識すれば，この関係をよりよいものにすることこそが真の人間の実践である。”ということをあらわしている。般若経の中に「色を空ずるを以ての故に色空ならず。色即ち是空，空即ち是色」（『摩訶般若波羅蜜経』幻学品第十一）とあり，また維摩経の中にも「色即ち是空。色滅して空なるにあらず。色性自ら空」（入不二法門品第九）[24]とある。つまり現実の事物を徹底的に分析し捨象していけば，それは単に人間の認識しかなく，空になってしまう。そう考えるのは小乗仏教であり，虚無主義，ニヒリズムに到達してしまう。日本に渡来した大乗仏教は生成躍動している事物をそのまま全体的に空と観るところにその特徴がある。事々物々が相互に依存相関し，全体として一つになり生成躍動していることを空とする。空とは事々物々をありのまま，客観的，全体的に観察することである。そうすると，いかに相互依存関係が大切であり，事々物々を捨象しつづけていっても，どうしても最後にこれだけは残ることがわかる。そうすることによって自己の主体的実践が生れてくる。ある人が亡くなって遺骨になり灰になって消滅しても（色即空），その人と関係のあった人々の脳裡にはその人の言動，姿は残りつづける。事物は消滅するが関係は永く存続する。実はこの関係しか世の中には実在しないのである（空即色）。この世の中にこの関係しかないならば，自分の人生ではこの関係を少しでもよ

23）栄久庵憲司　上掲書　pp.207～208.
24）田村芳朗　法華経　p.34　中公新書，1971年。

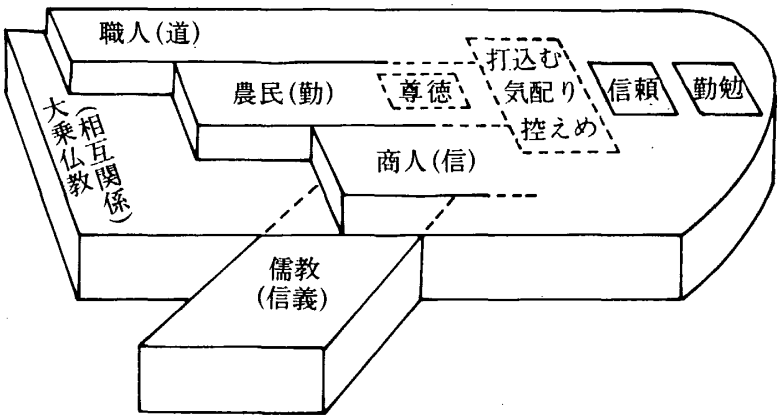
りよいものにしようとする実践の考えがでてくるのは当然である。これが日本人の和の精神につながっていく。

江戸時代の儒教，特に朱子学は社会制度の中の信義の重要性を説く。それまでの仏教のように人生の哲学，考え方を重視するのではなく，人間と社会との本来的あり方を根本問題とした。その説くところは，現実的な礼制，儀法，政治・経済思想，道徳論などであり，特に日本の指導層に受け入れられたものは，家族，君臣，個人倫理だけであった[25]。江戸時代の儒家，熊沢蕃山（1619～1691）の「五倫の本」では，人間に内在する五常（仁義礼智信）は根元的な徳性というよりは，人とのつながりとしての客観的社会的な機能性を重視する。“大道とは大同なり。俗と進むべし，独り抜きんずべからず。衆と共に行うべし，独り異なるべからず”という[26]。信義を重視する社会では一人突出してはいけない。つねに「控え目」でなければならない。前述の農民，商人，特に士農工商の固定化した社会制度の下での商人の「分限」の考えは，この「控え目」の態度を強化していった。

儒教の基本的教義の五倫五常の中の五倫は，“人間関係において守るべき5つの道，すなわち君臣の義，父子の親，夫婦の別，長幼の序，朋友の信を指す。これは各種共同体を貫く身分秩序であった。こうした人間関係を支える道徳として五常があり，五倫五常を確守するために教学の学習とその実践が求められた[27]。”

この武士支配体制維持のための朱子学の道徳観は江戸時代の商人階級の中にもしみわたり，商人の経済取引の習慣にもなっていった。たとえば，大名貸などにみられる「信頼取引」の考えは，この道徳，信義に基礎をおく。この「信頼取引」とは非常に安定した社会において，1回の取引で儲けなくてもよい。取引相手が他の取引相手を紹介してくれたり，さらにその取引相手がさらに他の

図1　日本人の勤勉さの原因



25）溝口雄三　「中国儒教の10のアスペクト」『思想』岩波書店，1990年 6月号。
26）熊沢蕃山　蕃山集義和書，日本思想体系　30　p.88，岩波書店，1971年。
27）間　　宏　上掲学会発表。
28）拙稿　「『信頼』(Creditability) 取引の哲学」　『三田商学研究』34巻1号。

取引相手を紹介してくれたりして，これら多数の取引相手と多角的，長期的に取引することによって全体として利益がでればいい，という考え方である[28]。これは相手との信頼関係，信義が基礎になっている。この信義を得，維持していくためには，「まわり」からの厳しい評価をつねに気にしなければならない。

この江戸時代の儒教の共同体における信義重視の思想は，現代までも引き継がれている。ベネディクトは，日本人にとっては，名誉が最高目標であり，自分の属する世界，いわゆる準拠集団からの尊敬が最も大切であるという。すなわち，“日本人の恒久不変の目標は名誉である。他人の尊敬を博するということが必要欠くべからざる要件である。…日本人からみれば，自分の属している世界で尊敬されれば，それでもう十分な報いである[29]。”という。

このように儒教は，仏教の「関係」，特に「よりよい関係」をつくることこそが人間の生きる道であるという大乗思想のしみこんだ日本人の心の中に，具体的な「信義」「礼節」「秩序」というかたちで明示した。そしてそれを実践することが共同体にとって不可欠であり，それによって個人は共同体の中，すなわち「まわり」から高く評価されるのだ，と主張したのである。

このように日本人の勤勉さは，根元的には大乗仏教の「空即色」からくる実践の思想に深く根ざしているが，江戸時代になってその固定化された社会制度に合わせるため，その勤勉・実践が儒教の「信義」「分限」という明示的な枠から評価されるようになってきた（図1参照）。

3　日本人の勤勉さの崩壊

一つの仕事に打ち込む生真面目さが日本の若者に薄れてきた。二宮尊徳を原点とする，仕事を「道」とか「自己修養」と考える勤勉さは失われつつある。“仕事と仕事以外の生活のどちらに生きがいを感じているか”という，世界の青年の仕事に対する最近の認識調査によると，“どちらかといえば仕事”という青年は，調査対象国11ヶ国中，日本は下から3番目である。韓国，中国，シンガポールという儒教国，仏教国はもちろん，英，米，オーストラリア，西独などキリスト教国よりも下である[30]。特に低学歴の人は仕事に生きがいをもっていない。仕事以外に生きがいをもっている。他の総理府調査でも，今後の生活の仕方について，“物質的にある程度豊かになったので，これからは心の豊かさやゆとりのある生活をしたい”と“まだまだ物質的な面で生活を豊かにすることに重きをおきたい”の2つにわけて日本人に調査すると，1975年以前は，物の豊かさを重視する人が心の豊かさを重視する人より多かったが，1978年からそれが逆転し，1988年には後者が

29）ルース・ベネディクト（長谷川松治訳）『菊と刀―日本文化の型―』，pp.198～203，社会思想社，1972年。
30）総理府青少年対策本部　「世界の青年との比較からみた日本の青年」世界青年意識調査。（第4回報告書，1989）pp.35～40.
31）通商産業省商政課編　『90年代の流通ビジョン』　p.136，1989年。

50%，前者が30%になってしまった[31]。日本人は既に物質的なものより，心の豊かさを求めるようになっている。

それなのに現実の若者は空前の人手不足のためワークホリック以上に働いている。これらの調査結果と現実とは乖離している。一般に価値観についてのアンケート調査ではタテマエがでる。これは嘘ではなく，その社会の向うべき目標をあらわしている。すなわちこの調査結果は，二宮尊徳以来連綿と続いてきた，勤勉は絶対であり普遍的な価値であるというタテマエ，あるいは日本社会の目標であるという価値観は崩れてしまったことを示している[32]。若者は，仕事はいやだが，仕事以外の生活を豊かにするためやむをえず働くのである。

それではいまの若者はどのような生活を豊かと考えるのか。それを現在のサービス産業の成長度の切り口からみてみると，次の５つの欲求を満たすものであると推測される。すなわち，①代わってやってもらいたい，②楽にやりたい，③元気でいたい，④自分を磨きたい，⑤遊びたい[33]。この中で④を除いては，尊徳以来の勤勉，勤苦の美徳とは全く対極的な考え方である。④も「道」とか「自己修養」とはやや趣きを異にしている。現在の若者は厳しい受験戦争を経験しており，能力がないといかにみじめな思いをするかを体験しているので，実社会で活用できる能力の開発という意味で“自分を磨きたい”と考えている。このように日本人の「仕事に打ち込む」生真面目さは，物質的生活水準の向上とともに，この10数年来急速に低下し，特に若者においては，現在では諸外国と比べても非常に低くなっていると考えざるをえない。

一方，「まわり」の評価をうるための「気配り」能力も急速に低下している。現在少産化がすすみ，長男，長女，１人っ子が激増している。これらの子供はまわりから思いやられる能力はあるが，思いやる能力に欠けていることが多い。これは，他人に対して関心はもたないが，他人からも関心をもってもらいたくないという孤立主義ではない。他人からはつねに関心をもってもらいたいが，他人には関心をもたない。日本人が本来的にもっていた気持の上での「カシ・カリの論理」がわからない。大乗仏教でいう「関係こそ大切」という考えなど解ろうはずがない。自分の要求が通るまで泣きつづけるわがままな子供がそのまま大きくなってしまった場合である。

相手に関心をもつとその相手は生きがいを感ずる。身近な人の生き方，興味，得意とするものに関心を示すと，相手はそれに励まされて生きがいを感ずる。しかもその関心に自分が応えているという自負があるとき，生きがいは倍増する[34]。助手がやっている研究に，その指導教授や先輩の助教授が関心を示し，しかもその助手がその研究をさらに深く進めたときは,大きな生きがいを感ずる。ところが思いやられる能力しかない若者，あるいはそのまま大きくなった年寄も，他人には特別自

32) 千石保『「まじめ」の崩壊』p.167，サイマル出版会，1991年。
33) ソフト経済センター編『サービス産業の成長度』(ソフト化白書'91―'92)，ダイヤモンド社，1991年。
34) 野田正彰『生きがいシェアリング―産業構造転換期の勤労意識―』p.25，中公新書，1988年。

分に関心を持ってもらいたいが，他人には関心をもてない。そして自分に関心をもってもらいたい欲求が強くなり，それが満たされなくなるとウツ病にもなってしまう。眠れない，苦しい，まわりに嫌われている，自殺したいなどとまわりに訴えて関心をえようとする。近年の神経障害者の増加は急速な社会変化に最大の原因があるが，少産化による「思いやる能力」「気配り能力」の欠如による部分も多い。組織の中に入っても「気配り能力」のない若者は，まわりに気配りしないから，まわりからも気配りしてもらえない。特にまわりに同じように気配り能力のない上司，同僚がいるときは神経症になってしまう。現実には，多くの若者は学校生活，職場生活で，他人の得意なことに関心をもてば他人も自分の得意なことに関心をもってくれるという気持ちの上の「カシ・カリの論理」を学習している。しかし核家族の増加からやはり「気配り能力」のある若者は少なくなってきており，かえってそのためその能力のある人間は以前より高く評価されるようになっている。そして「相手の立場になってものを考える能力」は，現在の日本の組織のリーダーになるための不可欠な条件となってきた[35)]。

最後に，まわりに評価されるための「控えめ」「謙虚さ」も減少している。これは「気配り」能力と同様，核家族，子供数の激減という原因もあるが，戦後の米国式教育，特に海外教育，海外生活の経験によるところが多い。自己主張が強い，自己顕示欲の強い若者が激増している。米国で学位をとってきたような人は，日本へ帰ってきてもなかなか共同研究にうまく参加できない。共同で研究したものでも，先に発表した方が勝ちとばかり，自分の名前ですぐ発表してしまうからである。マスコミのあおり方にも原因がある。現在の出世の定義はマスコミにでることだと言ってはばからない大学教師もいる程である。しかし日本の組織の中では自己顕示欲の強い人は未だ評価されない。まわりのひがみ，そねみの気持ちが大きくその人の能力をそのまま評価しないからである。

日本人は江戸時代以来，「仕事に打ち込む人間」あるいは「まわりに気配りする人間」，しかもそれを「おもてに出さない人間」を高く評価し信頼してきた。このようなまわりの人々から高い評価・信頼をえたいという気持ちから日本人の勤勉さは生れてきた。すなわち日本のような信頼社会では，一生懸命働くと信頼される，信頼されるとまた一生懸命働く，という勤勉⇄信頼のレシプロカルな関係が維持強化されてきた。ところが近年この関係のチェーンが切れはじめてきた。そしてそのチェーンを修復する方法がまだ見出されていない。上述のように生活水準の上がった日本の若者は自分の仕事にうちこむ生真面目さ，気配り能力，さらに謙虚さがなくなってきた。このような若者は古い評価基準しかもたない人々の組織では評価されなくなり，急速に勤勉さを失いつつある。

35) 拙著 『大企業の活性化と経営者の役割』p.213，千倉書房，1990年。

4 要約と結び

ヨーロッパでは，労働は，古代ギリシャ・ローマ時代から奴隷のすることであると蔑視されていた。中世キリスト教時代になっても，労働は人間の原罪から生れたものであり，やむをえない苦痛と考えられていた。近世プロテスタンティズムの勃興とともに，労働に没頭することが神の恩寵にこたえる道という考えがでてきた。このようなヨーロッパの勤労観は，日本人にとっては少なくとも明治以前までは無関係であった。日本人の勤労観に影響したものは，中国から伝来した宗教思想，社会制度である。中国から導入された宗教は，仏教，道教，儒教の三教であり，社会制度としては，江戸時代の社会制度を強固にした士農工商の制度である。中国仏教は当初，遁世的意味を強調し，労働は僧の行うものではなく，僧は乞食，喜捨によって生きることを説いたが，新禅宗の創設後は，労働の重要性が説かれるようになった。道教は本来仏教より世俗的であり，特に新道教後は，世俗的な勤苦を奨励した。そしてその究極の目的は「道」であると説いた。儒教は世俗的な面が強く，士農工商など社会制度，政治・道徳・儀礼の局面を強調した。しかし労働自体についてはあまり論及しなかった。

日本人の勤勉さは，この中国から導入された宗教思想，社会制度によって形成されてきた。大乗仏教の，「関係こそ実体」という宗教観や，儒教の，特に朱子学の「信義」の考えが大きな影響を与えた。これらが，今日の日本人の「勤勉⇄信頼」の関係による勤労意欲の向上に結果していった。いままでの日本人は，「仕事に打ち込む」生真面目さ，「まわりへの気配り」能力，しかもそれをおもてに出さない「控えめ」さを高く評価し信頼した。信頼された人間はますます勤勉になり，仕事に打ち込み，まわりに気配りをし控えめな態度をとっていった。日本人の「仕事に打ち込む」ことの遠因は，平安時代からの職人の神社，仏閣に仕える仕事の宗教性にあった。江戸時代の農民の「勤」の価値観，また商人の「分限」に制約された利の追求が，またそれぞれ「道」や「自己修養」につながっていった。この中でもそれまでの仏教，儒教の思想を実践倫理にまで高めた二宮尊徳の功績は大きい。日本人の「まわりへの気配り」能力は，古くは奈良時代に伝来した大乗仏教の色即空・空即色から生まれた，「関係のみが実体であり，これをよりよくするのが仏教的実践である」という考えからでてきた。そして江戸時代，この「関係」の考えを社会制度の中に「秩序」「信義」として明示し，それを共同体の中で実践することを唱導したのが儒教である。それによって共同体すなわち「まわり」から高く評価されることになる。

日本の信頼社会で醸成されてきた，勤勉⇄信頼の相互関係のチェーンが最近切れはじめた。世界最大の債権国になった日本の若者は仕事以外の生活に生きがいを見出そうとし，勤勉,勤苦を普遍，最高の価値と考えなくなってきた。また少産化の進行により，まわりに思いやられる能力だけが発

達しまわりを思いやる能力の欠けた若者がふえてきて，勤勉を支えた他人を評価するという意識が減少してきた。さらに米国式教育，海外留学の経験のある若者がふえ，自己主張，自己顕示欲が強く，協調性の少ない人間がふえてきた。しかしこのような新しいタイプの若者を評価する人間，評価する組織は未だ十分にでき上がっていず，これらの若者は，働きながらもまわりから認めてもらえず，勤労意欲を失いつつある。

〈この論文中の大乗仏教の考えのヒントは，下郷太郎理工学部教授からの示唆によるものである。〉